

第5回ワークショップ記録

びわ湖大津歴史百科 5回ワークショップ

「知られざる三井寺の土人形」

講師：津田 徹英（東京文化財研究所文化財情報資料部 部長）

内容：講演／体験（素焼きのかわらけに童子顔の絵付け）

日時：2017年9月3日（日） 13：30～16：00

場所：三井寺事務所（〒520-0036 大津市園城寺町246）

参加者：52名



【講演概要】

三井寺（園城寺）の護法善神堂の堂内に多くの土人形が納置されていることが知られるようになったのは十年くらい前のことである。それらはわが子の健やかな成長を願って、子供を守ってくれる護法善神堂の鬼子母神に奉納されたと考えるのが自然であろう。そのような習慣がいつごろから行われていたかは記録もなく不明であるが、納められた人形から判断すると近代に入ってからのものである。それらは伏見人形の系統を引くものとするが、どのようなルートで入手され、奉納に至ったか明確でない。ただし、さまざまな人形が残るところをみると、それぞれの親たちが土人形を求めて窯元まで出向いたとみるよりは、受容があって大津町で入手できる環境が整っていたように思われる。ちなみに、子供の成長を願って神仏に人形を納める習慣は、滋賀県下では、大津市内の宇佐八幡宮（むし八幡）の土鳩、草津・守山の猩々（張子人形）、安土・轟地藏堂の千跡地藏（土人形）などがあるが、今となってはその存在や風習を知る人は多くない。人知れず護法善神堂に伝わった土人形の種類・造形を眺めながら、神仏に奉納される人形のありようについて考えてみたい。

【講師プロフィール】

津田徹英（つだ てつえい）

1963年、近江八幡市に生まれる。

慶応義塾大学大学院博士後期課程単位取得満期退学。

神奈川県立金沢文庫学芸員を経て、現在、独立行政法人文化財機構 東京文化財研究所 文化財情報資料部長。

2015年1月、『平安密教彫刻論』（のちに中央公論美術出版より刊行）により博士（美学）の学位を上記大学より受ける。専門は日本彫刻史（仏像・神像研究）であるが、密教図像、南北朝絵巻の詞書の書風研究など多岐にわたる。

また、土人形のコレクターとしても知られる。

【講演内容】

はじめに

只今ご紹介に与りました、東京文化財研究所の津田でございます。

過去に、大津市歴史博物館で三井寺さんのこの土人形についての展示会をやるときに、学芸員の寺島君から——私が小さいときから人形のコレクションをしていると知って——「いっぺん見に来てくれるか」と誘われました。ふらっと寄せて頂くと、非常に良質な土人形が、これだけの数集められており、大変驚いたということがございます。

ここ数年、三井寺の土人形は知名度が上がってきていますけれども、まだやはり、全体像というか、特に「大津に於いてこの土人形をどういうふう位置づけるか」という事は、ほとんどなされていない訳で、今日はこれから90分、あくまで私の見立て、見方というのをお話しさせて頂こうと思います——。

この土人形が納められていたのは、（三井寺の境内にある）護法善神堂というお堂でございます。護法さん、千団子社とも言いますが、ここの主神は護法善神、並びにその脇におられる訶梨帝母です。これらはいずれも子供の守り神でございます。いまも五月には千団子のお祭りがありますが、子供を守ってくれる神様として、大津だけではなく、京都、東京でも聞こえている有名なお祭りです。また、護法善神・訶梨帝母どちらの像も重要文化財でありますので、色んな美術全集に載っています。その護法善神堂に奉納されたものが、今回のこの土人形群でございます。私も、まさかこんなにお堂内に残っているととはつゆとも知らなかったんですけども、今日はこれについて、私見を交えてお話しする予定であります。

三井寺土人形の特徴と傾向

まず、77体ある人形をざっと概観しておこうと思います。

どれも非常に小さな、10cm 足らずのものから 15cm 程度のものです。手のひらサイズというぐらいのものでございます。

「礼者」

袴を着けた男の子の人形です。「礼者（らいしゃ）」というふうに仮に付けておりましたが、どれも名前は付いておりませんので、一応私のほうで適当にというか、一般に事典に載っているような名前で、それらしく名称を付けさせてもら

ったものです。ですので、まだまだ変更される可能性は充分にあります——。

人形の色は、これは土人形の常で、正面しか色をつけないんですね。全体を白く塗って、色の発色を良くしたうえで、減多に後ろのほうは描かない。安置するのも正面向きで、せいぜい横から眺める程度ですので、後ろから見るといのはほとんど無い訳です。

型としては、「前後の合わせ型」で、前半部分と後半部分に分かれて、それをカバッと合わせて作っている。焼いたときに中の水分が抜けないと困るので、中は大体空洞になっているものが多いです——重さの軽減ということもあります——が——。

「芥子人形」

それから、こういう小さなものが4体あります。私の見立てでは向かって右のものが一番古くて、江戸の末ぐらいまで上がるかなと。他の3つは、ちょっと形が丸くなっていますけれども、やや下がって幕末から明治ぐらいまでかなと——。

追々述べていきますが、三井寺の土人形はほとんど、基本的には伏見人形だと私は考えておりますが、この「芥子人形」に関しては今の伏見でもちょっと見ない型なんです。

それで最初、名前をどうしようかと思ったんですが、実は仙台にも、似たものというか、芥子人形と称されるものがありまして、大きさもほとんど変わらないものなんです。恐らく、本来はやっぱりまん丸じゃなくて、ちょっと縦長で丸い感じのものであったんだろうなというふうな気が致します。これを見て、やっぱり（この三井寺の4体も）「芥子人形」というふうに、仮に名前を付けておきました。

伏見にも（芥子人形が）あったであろうという傍証ですが、滋賀県の小幡、今の東近江市の五個荘、ここに小幡人形というのが今でも作られております。写真のものは先代の細居文蔵さんという方が作られたやつですけども、小さな、同じぐらいの大きさなんです。私はてっきりこれ、——文蔵さんは割と、創作人形を多く作られていたんで——「その創作の一つだろうな」というぐらいにしか考えていなかったんです。けれども、頭の頭巾を取ってみると、（三井寺の芥子人形と）ほぼ同じような型を使っているのが解ります。小幡人形そのものは、ほとんどが伏見の型を使っています。伏見人形を買ってきて、それをもう一回型取りして作る訳です。若干、型の鮮明さが緩くはなりますが、ですが、やっぱり元型は伏見にあったということで、三井寺の「芥子人形」も、伏見系と見て良いんだろうなというふうに考えている次第であります——。

「手習い」／「風呂敷抱え」

ここからあとお見せするのはほとんど、立像になります。立っている姿であります。

これは特に、物を持っているもので、仮に「風呂敷抱えを抱えている」というふうに見たものです。また、写真左側のお子さんの人形は、小さな通い帳を持っている。これは手習いの通い帳なので、「手習い」と名付けた訳です。

一見、並べてみるとよく似ているんですけども、時代から言うと、「風呂敷抱え」のほうは若干江戸に遡るのかなという気が致します。割とひよろ長くて、真下から見ますとちょうど横一文字に線が走っているのが解ります。前の型と後ろの型を合わせて作った、というものであります。更に、横から見たとき耳の所で、合わせ型の、ガリと言うんですか、そういう所も窺えるかと思えます。顔は丸くなっているんですけども、体が華奢で非常に細い。もう一つ後に紹介します明治末期の「饅頭喰い」から見ると、首から下が全体的に型が緩いというか、メリハリが無いんですね。ですから、こういうものが江戸時代の伏見系なんじゃないかな、というふうに私は考えております。

一方、「手習い」のほうは、——後でも出てきますが——左右で色違いの「片身替わり」という着物を纏っているかと

思うんですけども、こういうものが、どれぐらいまで遡るかということでもあります。

「尺八童子」

これはちょっと大きいんですけどもまあ尺八であろうと。とりあえず「尺八童子」と名付けてみたんですけども。あるいはこれも見立てで、——後ほど「見立て〇〇」のものがいくつか出てきますが——「見立て高僧」というふうにしてしまっても良いのかなと考えてもおります。このように童子で、髪の毛が無いんで、実際の年齢でいうと二歳ぐらいの可愛い子供を表しているというふうになろうかと思えます。

「狎抱き」／「猫抱き」

動物を抱えているものが3体ございます。写真左の二つは犬を。おそらく狎でしょうね。右のほうは、これは猫です。

私の知る限り、伏見でもこの動物抱きというのは最近では作られていないんで、珍しいなと思うんですが、そんなことを思っていたら、矢張りこういうものが前提となって、小幡にも「兎抱え」というものがあります。これもてっきり、「先代の文蔵さんが兎年にちなんで作ったのかなあ」というふうな理解をしていたんですけども、どうもそうではなくて、こういった動物抱えのものの伝統の中で、矢張り「元型が伏見にあったのかなあ」というふうな気が致します。総じて小幡のほうはこういうふうにならざるに、色が割りときつい感じの特徴があるんですが——。

「桃抱え」／「宝珠抱え」／「狐面抱え」

それから、抱えものとしては、写真左から桃。真ん中はこれは緑色になっていますけれども宝珠、宝の珠（たま）ですね。それから狐のお面。（伏見人形の窯元は）伏見稲荷が近いので、狐のお面というのはやっぱり自然に出てくるんだろうなという気がします。ちなみに真ん中の宝珠の子は、左肩が肌脱ぎになっている、というものであります。

「俵抱え」

さて、他にも「俵抱え」というふうな、力持ちを表しているものがあります。この内、写真右のほうですが、ここ、両方穴がありますね（両耳の上辺り）。これは何かと言いますと、ここへ、糸とかで、ほつれ毛というか、そういうものを多分差し込んでいたんだろうと思います。今、伏見ではあまりそういうことをやらないんですけども、小幡なんかですと今でも、糸で、ちょっとした鬚髪というんですか、耳前の髪の毛をこんなふうに入れているものがあります（小幡人形の饅頭喰い）。ですので、これも恐らくそういうものであろうと。米の俵を持って運んでいる「俵抱え」、これは、子供がすくすくと健やかに、力強く育ってほしい、そういうものを表しているんだろうと思います。

「子ども力士」

これは子供の力士の姿をしています。実際、うちの子供でもそうでしたけど、大体（生後）100日くらいという、ぶくぶくになるんですね。本当に、一番太っている時期で、まわしを付けたら本当にこんな格好になるので、この人形もそういうものなんだろうなあという気が致します。

「饅頭喰い」

あと、有名なものでは「饅頭喰い」。これが7点程ございます。

この「饅頭喰い」なんですけれども、一般には、「お父さんとお母さんとどっちが好きか」と聞かれた子供が、パカッと饅頭を割って「どっちが美味しい？」と聞き直した——味が変わるはずはない、親の愛に変わるはずはない——というふうな、寓話を表したものだと言われているんです。明治5年ぐらいに、この話が東京毎日新聞なんかに取り上げられて、そこから「饅頭喰い」が急に大流行しました。一般に、現在全国に残っている「饅頭喰い」というのが、大体明治7～8年（1874～5年）のものですけれども、（三井寺の「饅頭喰い」が）その流行に合わせて作られたものの一つと見るか、それとももう少し古いものなのか、ということなんです——。

一つ、注目しておきたいのが、三井寺の「饅頭喰い」なんですけれども、よく見ると、着ているものの左側、ちょっと見辛いですけれども、薄赤地に、濃い目の「ストライプ」が入っているんですね。それで、明治ぐらいの知られているものも含めて、日本に残っている他の、伏見の影響を受けた「饅頭喰い」を眺めてみても、この縦縞というのは無いんです。文政二年に合川珉和という人が、『通神画譜』というものを著している中に、伏见人形の「饅頭喰い」が入っているんですが、その絵が、縦縞が太い黒で、右肩のほうは真白の無地で描かれているんです（モノクロなので）。どうやらこれと対応するものであろう、と。つまり三井寺の「饅頭喰い」は、今日知られている「饅頭喰い」の中の、一番古い図柄を継承しているものと見られる訳です。ただし、図柄は古いんですけれども、（人形の制作時期そのものが）果たしてこの文政の『通神画譜』に描かれたものと同時期にまで遡るかというのは、若干、検討が必要になってきます。無難に、「幕末から明治ぐらいまで」とちょっと下げるだけのほうが良いかなと。むしろ、そういう古い（図柄の）伝統をしっかりと守っているものの一つかなと——。ただやはり現存の「饅頭喰い」の中では、そういった古い記録に出てくるものと照応したものとして、おそらく、私が知る限りではこの三井寺さんの土人形が唯一ではないかなという気が致しております。

そういうものが実は、（同じ「饅頭喰い」で）もう3点あります。どれも色が飛んでいるのは、おそらく染料を使っている為です——顔料だと割りに残りが良いので。何か植物性の染料で表面を塗った為に、色が飛んだんだろうと思うんですけれども、この真ん中の像にしてもやはりよく見ると、太い縦縞が残っておりますので、これも先ほど申しました文政、江戸末期の「饅頭喰い」の図柄をそのまま残しているんだろうなという気が致します。

それと、今日のワークショップチラシのメインになっている、「饅頭喰い」の1体ですけれども、このように、さっきのものより形がカチっとしてくるのは、これはもう明治末期ぐらいのものであります。ただ、あんまりこういう片袖で——おそらく産着だと思うんですけれども——、菊か何かの模様になっているというのは、これしか見ないので、これも伏見と考えるかどうかというのは、異論のある人も実はあるんですけれども、まあ私はやっぱり伏見かなと思います。

あと、残り3体だけが、これはどうも伏見じゃなさそうですね。私の見立てでは、清水辺りの土人形かなと。この、ちょっと金泥っぽい着色をするのが、安手の清水製に、明治ぐらいにありますので、そういうものかなというふうを考えております。この3体だけが、77体のうち、（伏見とは）違うところから来ているものですが、いま清水も土人形がなくなってしまいましたんで、そういう意味では非常に貴重なものです。時期としては、世間で「饅頭喰い」の人形が逸話と共に爆発的に流行するのが明治5~6年ですので、それ以降に作られたものの中の一つであったらうと、ということになろうかと思えます。

「手獅子」

それから、「手獅子」のものが3体あります。

「鈴持ち」

これは、片肌を脱いだ、「鈴持ち」と呼称されるものであります。

「太鼓乗り」

この1体、残念ながら上半が欠けてしまっていますけれども、元は多分、伏見のものと同じ型だろうと思うんです。いま伏見でも、丹嘉さんで——伏見稲荷よりちょっと京都駅寄りに行った所ですけれども——たまに出ますんで、これと同じ型だと思います。むしろ型取りのほうから言うと、三井寺さんのほうがきっちり型が取れているように思いますが、元の姿はこういう（丹嘉のもののような）姿であったと。パチを振り上げているところですね。子供が、太鼓の

上に乗って、太鼓を叩くというものです。

もう1体、これの型は、やっぱり子供が上に乗って、両手でバチを持っているんですけども、ついぞ見たことが無いんです。ですがやっぱりこれだけ特別というよりも、伏見の古い型なんだろうなと。「太鼓乗り」のこういう形が定形となる以前の、初期の頃のものとして良いような気が致します。これもやっぱり、類型的な表現ではありませんので、江戸時代に遡るものというふうに見ております。

「馬乗り」

続いては、唯一、馬に乗っている男の子であります。こんなものもございます。

「見立て西行」

それから、「見立て西行」と小別されるものがございます。何故、西行かと言いますと、幕末から明治にかけて、伏見では西行法師の人形というのが割と人気がありました。写真右（伏見人形「西行法師」）なんかもそうですけど、（頭より）笠のほうが大きいです。カツンと当ててしまっても、首は取れても荷物は取れない。つまり、首が落ちても銭は体にちゃんと残っているという、云わば、お金から縁遠くならない、というような発想がどうもあったみたいです。

写真右側は、菱屋さん——もういまは無くなってしまいましたが——のものです。写真左側は、丹嘉さんの先代の作ですが、笠を持っている。「笠持ち」というのが西行法師の特徴で、それを、笠だけとってきたもので「笠持ち童子」と言う人もいますが、これは明らかに「西行さん見立て」です——見立て物というのはいくつかございますが、そういうものが、（三井寺の土人形にも）割と沢山残っております——。こちらは、左腰辺りに笠を持っている男の子。それとはバリエーションでやや形の違うもの、手の位置が違ったり、笠の高さが違ったりするものがありますが、三井寺の「見立て西行」は全部で8体程ございます。これも、こんなに纏まって残っているのは、私も見たことがありません。

「見立て唐子」

あと、唐団扇——普通のうちわじゃなくて、軍配のようなものですが——を持っているものが何体かあります。これも、実は、近世に唐子図というのが結構持て囃されて、唐子——中国の男の子なんですけれども——は、必ずこの唐団扇を持つというのが約束事になっています。これもやはり、この唐団扇から「見立て唐子」というふう呼んだほうが良いのではないかなという気が致します。

この「見立て唐子」も結構沢山ございまして、左肩のところへ団扇を当てるものや、脚のところへ持ってくるものなどございます。或いはこれも片身替わりで、さっきの「饅頭喰い」と同様、やはり縦縞の線が残っています。古い、童子物の、江戸以来の伝統を伝えているものであろうかという気が致します。

「団扇持ち」

いま見たものよりはちょっと古い、普通の団扇を持っている男の子ですけども、あんまりこれも見たことない形のもので、おそらく、古いものがそのまま残っている。つまり江戸の末期ぐらいまで遡るものの一つだろうと、私は見ております。

「見立て大尽」

それから、「見立て大尽」。普通の男の子がちゃんと羽織を着て、ちゃんとした羽織の紐を結んでいるものであります。これも、お大尽の見立て。まあ、ええとこのボンボンということでしょうね、そういうものであります。

「見立て五斗」

それから、これがちょっと分かり難いです。なかなか、説明が出来る人が少ないと思います。私もこれが「見立て

五斗」だと気が付いたのは10年ぐらい前の話なんです。これは、どういふふうな判じ物かと言いますと、編笠を、普通に被るんじゃなくて縦にして、鉢巻で留めている。烏帽子みたいな感じですね。普通はこんなふうには着けないんです。そして、肩には箒をかついで、その箒には二升樽が引っ掛かっている。手には扇を持っている、というものですけれども——。

これは何かと言いますと、芝居に『南蛮鉄後藤目貫』という、最近では『義経腰越状』という名前に統一されているものがある、その鉄砲場の「五斗兵衛」という者をやっているんだと思います。七代目中車のやつですが——いまの香川照之が確か九代目だったかな、だから先々代のもので——、この『義経腰越状』という芝居自体が、滅多に出ない。私も芝居を見出して40年ぐらいになりますけれども、今まで3回ぐらいしか観たことがない。しかも、序幕しか出ない。この鉄砲場というのは二幕目の奥の場なんですけれども、これに至っては私も1回しか観たことがないんです。それで、これがどういふ芝居かと言うと、後藤というのが、いま五斗というふうになっておりますけれども、後藤というのが本場で、これは去年『真田丸』にも出てきました後藤又兵衛の芝居なんです。浪人していた後藤又兵衛が、豊臣秀頼に謁見して雇ってもらおうということで、或る人に間に入ってもらい、ついにお目見えの日になった。で、江戸時代のことですので実名は使いませんので、秀頼公というのを義経に名前を置き換えて、後藤又兵衛を五斗兵衛というふうな名前に変えて、時代も、桃山時代から鎌倉時代に置き換えた話なんです——。けれど、謁見をするにあたって、それを良く思わない義経の家臣二人が、この待ち合わせの所で五斗兵衛をべろんべろんに酔わしてしまう。散々に酔い潰れて、お目見えを失敗して、帰されるというところが序幕なんです、二幕目の、べろんべろんに酔って帰ってきたところがまさにこれ（土人形「見立て五斗」の姿）なんです。それで、芝居の続きはというと、その話を聞いて、奥さんが愛想を尽かして、離縁状を五斗兵衛に突きつけるという、どうしようもない芝居なんです——。まあ、実は、酔ったのは見せ掛けで、どれが味方でどれが義経の家来の中で悪人かというのを見極める為に、というのが眼目の芝居でして、関西では割と、明治まではよく出ていたみたいです。残っている写真等を見ますと、いまは笠を着けていないんですけれども、当時はどうも笠を着けていた。（「見立て五斗」も）本来はこういう笠を、烏帽子風に見立ててやったものがそのまま引き継がれている、と見たほうが良い。明治の末ぐらいのものとしては、私はこの三井寺の土人形の中では「饅頭喰い」と共に上出来のものかなというふうを考えております。

「おぼこ」

それから、いくつか女性のものがあります。「おぼこ」、「おぼこ娘」と一般には言われるものですが、関西風に言うところ「いとさん」とか「こいさん」と称されるような、ええとこのお嬢ちゃんですね、そういうものを表したものです。本来は、糸で作ったかつらを付けていたんですね。それが無くなったので、いまはこれ、全然髪の毛が無いんですけれども。

「おぼこ・団扇持ち」

ちなみに、団扇を持っているものもあります。写真左側のものですが、ここに髪の毛が貼り付けてあったのが、残っています。ニカワか糊で、ご飯粒みたいな糊で付けていたので、時間が経つと取れてしまったんでしょう。おそらく背中の上までべったり付けられるように、背面は割と、凹凸が無くペタンコになっている。元は、普通の髪の毛が付いていたものであったと見て良いと思います。

「おぼこ・綿帽子」

これとともに、綿帽子を被っているようなものもあります。これが多分、江戸に遡るものと私は見ております。2体ございます。

3体目は、これは明治まで時代が下がるかなと。後ほどこの理由は述べますが――。

「御高祖頭巾」

それから御高祖頭巾の女の人が、あるわけなんです。

若干、注意を要するのが、この「綿帽子」と「御高祖頭巾」は微妙に年齢差があるということですね。子女の年齢差を表している。それはどこかと言うと、まず「綿帽子」は振袖。一方、「御高祖頭巾」は留袖。それから勿論、御高祖頭巾と綿帽子の違い。「綿帽子」は一見、手拭いをバラッと頭に掛けているようにも見えますが、これが手拭いなら後ろはこういうふうに分けてすけれども、繋がっていますので、やっぱり綿帽子と見たほうが良いでしょうね。「綿帽子」は、妙齡の、適齡の、若い女の子ということになるかと思えます。

一方、「御高祖頭巾」のほうは、振袖じゃありませんので、既婚の女性ということになるかと思えます。更に、二通りありまして、白い頭巾の人と、濃い頭巾の人とあります。それから微妙に、写真右のほうはお腹の前で、前帯で括っている。文庫なのか、太鼓なのか、ちょっとよく分かりませんが。写真左のほうは後帯で、やっぱり同じような形で表しているんですが――。ちなみに、写真右の前帯のほうは、更に上に、訪問着としての白っぽい打掛を着ているというふうに見られます。その下から、赤い着物が覗いているんですね。帯の真下にこんなふうに着物の下が入ってきているのは、元々は裾を引っ張るような長いものですが、それを上から羽織って、お腹の下でまとめて、志古貴か何かの帯で括っているということです。当然、後ろから見ると帯が見えない訳ですね。背面は志古貴が留めになって、着物を端折って留めていますのでここが袋状になっている。前は、おそらくこの紐が下へ回り込んで留めているということです。

ちなみにもう一つの「御高祖頭巾」のほうですが、比べてみますと襟がよく見えていますので、この人は打掛を着ていない。その証拠に、後ろから見ると、帯が背中のところ幅帯で入っている。割と、そういうところをきっちりしているんですね。

「叶福助」

福助さんが2つ。

「布袋」

それから、布袋さんが2つ。

「布袋 見立て力士」

これは多分、子供やなくて、布袋さんの力士に見立てた福福しい姿。力士にしてもお腹がドンと出た感じなんで、これは布袋さんだろうと見ている次第であります。

以上が、77体。一通りざっと見てきた訳であります――。

三井寺土人形の特徴と傾向・まとめ

人形の特徴と傾向をまとめておきますと、総点数が77点で、このうち童子、男の子が61点――うち21点が「見立て物」、いわゆる「見立て西行」とか「見立て唐子」――。それから娘ですね、綿帽子を付けていた女の子とか、それらが7点。ご婦人のものが、「御高祖頭巾」のものが4点。その他、布袋さん3点と、福助さん2点であります。圧倒的に子供のほうが多い、というのがこの三井寺の土人形の特徴になるかと思えます。

そして、時代ですが、チラシのほうには「明治」というふうに書いておいたんですけども、よく見るとやっぱり江戸時代末ぐらいまで遡るだろうと。このあたり、どういふふうに編年を考えるかと言うと――。

江戸末期

江戸末期のものというのはおそらく、この8点ぐらいであろうと。割と赤色が中心になって、緑はあまり使われていない。「風呂敷抱え」の一つは緑を使っているんですけども。それと、いまの伏見から考えると、ちょっと形がないというか、ひょろ長くて、まだ初期の傾向を残しているもの。これを江戸の末期ぐらいと見ておいて良いのではないかと。

幕末～明治

そのあと、やや形がしっかりしてくるもの。その中に、持ち物とか着物の一部とか、或いは俵とかそういう装飾品の一部に緑色を使うものが出てくる。ただ、着物についてはすべて朱というか、赤色を使っているというのが、次の段階のもので――。

明治前中期

この緑というのがだんだん着物のほうへ反映されていくというので、例えば、上の段の真ん中2体（「礼者」の1体と「見立て大尽」の1体）ですね。袴とか羽織が、緑色だったのが、そのあと、着物が左右の片身替わりで、装束が赤と緑のような表現になってくる。そういうものが明治前期から中期ぐらい。まあ、どの辺に置かかというのはちょっと解りません、正直に言います。

明治末期

そして、最終段階にはこういった割としっかりとした、今日でも伏見の土人形のなかで見ることが出来るような型を持っているものを、明治末期のものと一緒に先ず見立てました。なお、下のこの3つ（「饅頭喰い」の3体）については、これはどうも伏見ではなくて別の、一先ず清水辺りと考えているものであると。そうなってくると、77点のうち74点がほぼ伏見人形、若しくは伏見人形系と称されるものと見て良いかなというふうに考えます。

まとめ1

簡単に言いますと、江戸末期の赤を主にしたものの。それを踏まえながら更にちょっと形がしっかりしてきたものが幕末～明治ぐらい。そしてその中で、持ち物に使っていた緑というものが、着る物に展開して、更に一枚の着物のなかでもこういった片身替わりというような色使いの展開があったと――。ただし、厳密には明治のこの辺りというのは、「着物のものが先で、片身替わりのものが後だ」というふうに一概には言えないので、広く「明治前期もしくは中期」ぐらいにして考えておく。更に、明治末期にはこういうもの（「饅頭喰い」の1体、「見立て五斗」、「鈴持ち」の1対、等）が、片身替わりのものが残ったり、割と形がしっかりしてくる。それとともに、――後ほど言いますけれども――この中では向かって右（「鈴持ち」の1体）の白がちょっとくすんだ灰色になっていますね。これもちょっと注意して見てもらいたいと思います。

まとめ2

彩色は、赤と緑を対照色として使用しているというのが特徴ということになるでしょう。この、赤と緑を地色とするものを、通称「赤物」と言います――最初の江戸末期ぐらいに遡るものは真っ赤でしたから、本来はああいう赤いものを中心に言うんでしょうけれども。安手のお人形で、「一文人形」と別名されるように、比較的安価なものであったということも注意したいと思います。

（産地は）伏見、もしくは伏見人形系であると私は考えるんですけども、ただ、先ほど申しましたように、この明治末期ぐらいの「饅頭喰い」ですが、産着の裾に、菊が三段重ねで描かれているようなものというのは、ちょっと他の伏見にいままで見たことが無いので、果たしてこれを伏見と見るかどうか疑問視する人もいます。ただし、いまの伏見の「饅頭喰い」というと、これぐらいの、全然表現が違うんですね。割とどぎつい感じの（彩色の）産着を着ています。

特に第二次世界大戦前後からは、伝統工芸品として綺麗なものを目指すので、だんだんやっぱり変わってきた。写真右(菱屋の人形)のほうは、顔なんかは比較的明治のものを引き継いでいるように見えますけれども、丹嘉さんのほうだと、若干、頭のところに群青の薄い色、白緑を差したり、目の中に瞳を入れてというような表現の違いなんかも出てきます。私が(三井寺のものを)伏見と考えるのは、例えばこの狐面を持っている、そういうものが明治末期ぐらいのところに展開したのが「饅頭喰い」と見ますと、やっぱり眉は内寄りに山を作って、柳のように描くとか、眉の上にも小さく線を引いたような表現、やはりそういったものを引き継いでいるものがあります。しかもこの片身替わり、確かにこういったものはいまの伏見では全然見られませんが、色々と、本なんかで紹介されているものを見ますと、明治の伏見人形なんかでこういう例がありますので、この片身替わりのものというのは、伏見でも作られていたというのは間違いのないと思います。

更に、これはネットから拾ってきた写真ですけども、(三井寺のもの)と同じ型のもので、伏見の赤物として紹介されていたものです。この人形、まさかこれも近世まで遡るといえるのは、これ一つ見てたら解らないんですけども、間違いなく三井寺土人形のこの展開を考えると、やはり近世に遡る伏見の赤物というものが残っていると言えるかと思えます。

【補足】伏見人形の「赤物」

そこで、もう一つ補足をおこななければなりません。

この伏見の赤物というのが、三井寺さんの存在を抜きにすると、いままでちょっと、考え方がどうも違っていたような気が致します。

伏見の赤物といいますと、普通はこの写真のようなものを言います。安手の人形というのは間違い無いんですが——。ちなみに参考までに、たまたま同じようなものが(現在の伏見人形にも)あったので、比べてみようと思います。昔の赤物のほうは、何か、飴色にテカっていますね。いまのやつは普通、同じような条件で作ってもテカらないんです。これは何かと言うと、表面にニス、ワニスをかけている訳です。人形類についてもこんな風にワニスをかけている。こういうのが赤物と称されるもので、赤色中心で、どぎつい赤ですね。しかも、片身替わりではなくて、着衣全部が赤であったりします。大黒さんなんかは打ち出の小槌まで赤く塗っている。こういうものが、一般にこれまで知られていた赤物なんです。そんなのを見ていると、やっぱり古い赤物のワニスが付いているもので、片身替わりのものがあるんですね。この片身替わりというのが実は、伏見の或る古い時期に、割と流行していたんだと。で、そういうことを考えると「ワニスを塗っている or 塗っていない」、これが(人形の年代を見るときの)一つの手掛かりになるんじゃないかと考える訳です。

土人形へのワニスの使用

土人形へのワニスの使用ということが、時代を解明するときに手掛かりになろうかと思えます。

【史料 1】有害性着色料取締規則

「有害性着色料取締規則」というのが、明治 33 年(1900 年)7 月に法令として出されました。これは何故出されたかと言うと——。「玩具等ヲ製造販売スル者其害毒ノ有無ヲ省ミス只色彩ノ鮮麗ニシテ衆人ノ視線ヲ集ムルカ如キ性質ノモノヲ使用スル者少カラス」つまり、絵の具が有毒性のものなのに、子供が遊ぶものでそういうものを使っているというのは宜しくない、ということで規制が出たんですね。これが明治 33 年。

この有害性着色料というのは何かと言うと、「左ニ掲ケル物」とあり、その中でいくつかずらずと挙げられています。

中でも重要になってくるのが、砒素、銅、水銀、鉛、それから藤黄というものです。砒素というのは、黄緑（の着色に使われた）。それから銅というのは、緑青ですね。釣鐘の酸化したやつが、あれが緑青です。あの緑色は、銅から取っているんです。それから、群青色。これは藍銅鉱と称されるものであります。それから、水銀というのは、——今だと体温計のやつから銀色みたいなのが見えていますけれども——本来は、水銀朱と称される赤色の原料です。それから鉛も、鉛丹と称されるもの（赤色）。それから鉛白、これは白粉にも使われていましたね。最後に、藤黄というのは名前の通り黄色です——。これらが、まさに土人形に使われていたやつで、先ほど「くすんだ白が・・・」と言いましたが、これがたぶん鉛白なんだろうと思います。鉛を使っています。赤い所は、これはたぶん水銀朱のほうですね。それから緑の所、これは間違いなく緑青だと思います。頭部の白群は、これは岩群青を白で溶いたもの、若しくは細かく砕いてやるとだんだん白味がちの群青になりますので、そういうものを直接付けたものと思います。黄色の所は、これは藤黄だろうと——。まさしく、有害物質で塗られていた。子供というのは、小さいときは何でも口に入れますので、これは危ないということで規制が出ます。

条文の続きですけれども、第四條のところにこんなふうにありますね。「第一條第一種ノ着色料——先ほど挙げました、水銀とか砒素とか、鉛とか諸々のものですが——ハ、小児玩弄品（絵双紙、錦絵、色紙ヲ含ム）ノ製造又ハ着色ニ使用スルコトヲ得ス」要は、使用禁止令ですね。その理由箇所はと言うと、「諸種ノ玩弄品及ヒ絵双紙ノ類ハ常ニ小児ノ手ニシ、或ハ口ニ入ルルモノ多ケレハ、食料品ト同シク健康ノ障害ヲ来ス處アリ、故ニ有毒性着色料ヲ以テ玩弄品其他ノ製造又ハ着色ニ使用スヘカラス」という訳です。しかしそうになると、人形に何も色が使えないということになってしまうんですが、ただ、ちゃんと配慮はしているんですね。第四條のところに「但、左ニ掲クルモノハ此限ニ在ラス」と。その免責条件として、これの一項で「漆、硝子、釉薬又ハ瑛瑯質ニ有害性着色料ヲ融和シタルモノ」とあり、つまり、表面をコーティングしてあったら大丈夫だと。これが抜け道になって、着色料を使ったものの表面にワニス塗り出すことになった。日本中の土人形は、ほとんどがこの明治 33 年以降、ニスがかかってあると。明治 33 年以降、1900 年以降の出来事です。特に、この赤物と称されるものは安手で、普通の土人形の中では子供に買い与えることも多かった——まあ土が、直ぐに崩れてしまうものですが——。高級な工芸品等については、ワニスをかけないものもあったんですけれども、小さな、所謂赤物でワニスがかかっているものというのは、ひとまずこの 1900 年の「有害性着色料取締規則」というものに則って、伏見でも行われたと見做されます。

ちなみに、これは従わないと罰金刑なんです。「違背シタル物ハ二十五円以下ノ罰金ニ処ス」と書いています。この 25 円というのがどれぐらいかと言いますと、大体 1 円が今日の 3800 円ぐらいですから、25 円ということは 95,000 円、ほぼ十万円ぐらい取られる。人形は一個一文ですから、当時の金で 1 円もしない、50 銭とか、25 銭とかそんなもの。そんなものを（ニスを付けずに）売って見つかったら十万円の罰金を取られる、これはもう割に合わないの、みんな一命懸けにニスを塗る訳ですね。

そういうようなことを見ますと、明治末期のものを見たこれらの人形というのは、割と小さなもので、やはり赤物の系統に属するものと見たほうが良いと思うんですが、どれもニスを使っていない。ということは、どうもこれらは 1900 年の法令が交付されて運用される以前に作られていた、と見たほうが良いと私は考えます。

ですので、ひとつの目安としては、1900 年に「有害性着色料取締規則」というのが施行されて、土人形へのニス塗り、ワニス塗りの風潮というのが始まる訳ですが、この三井寺の土人形にはそういうものが認められない。ということは、おそらくそれ以前のものであろうと。そして、伏見の人形というのはだいたい 1800～1850 年、文化・文政の頃から隆盛を迎えます。ですから、おそらくこの 100 年の間（1800～1900）に、段階を経て、古いものは江戸時代に遡るものから、

そして明治末期まで、この 100 年のスパンの中で、護法善神堂へ奉納されたものが残ったというふうに私は考えております。

神・仏に人形を奉納する京滋の事例

さてここで、若干視点を変えまして、神・仏に人形を奉納する例というのを見ておこうと思います。これは、三井寺さんだけが特別なわけではありません。いまでも、そして過去においても、京都と滋賀では割とそういうものが残っております——まあ、関東でもあるんですが、近いところで京都と滋賀だけ見ておこうと思います——。

東向観音寺白衣観音堂の「世継子授人形」

有名なもので、北野天満宮の境内にあります東向観音寺白衣観音堂の「世継子授人形」というものがあります。北野の天神さんへお参りに行かれますと、最初の石の鳥居の脇に、東向観音寺というのがあるんですね。ここの門を入ってすぐ右側に、白衣観音堂というのがございまして、いまでも饅頭喰いの人形を「世継子授人形」として、授与して、それをそのまま納めています。私もこれ、初めて手に入れたのが高校二年のときで、そのときは全部で 9,000 円くらいだったんですけども。そこのお婆ちゃんに「これどうしはるん？あんたがいるの？」と言われて、「はい」と返事をしたら、「へえ……」と言われました。そのときの「……」が、「高校生やのにこういう人形に関心持ってえらいね」というふうに思っていたんですけど、私も子供を持つようになってからこの「……」が違う意味で言われていたんだなと、最近気がついた、そういうものですけども——。まあ、これはたぶん、清水系のものだと思いますが。

三宅八幡宮のかんの虫封じの「土鳩」

同じようなものとして、京都市の修学院のほうですけど、ここに三宅八幡宮というのがございまして、かんの虫封じの「土鳩」というのがございます。これはいまでも授与されております。このように、石灯籠の上にちょこんと奉納されていますね。このように小さなもので、本当に 3cm ぐらいのものでですけども、かんの虫封じの土鳩というもの。これを、2 つ貰って帰ってきて、子供の疳の虫が終わったらお礼にもう 2 つを納める。ですから、合計 4 個を納めるというような形です。いまま、お宮さんのほうから、この土鳩を求める人がいるようには聞いておりますし、私も十年ほど前に子供ができたときに、持っていなかったのでついにと買って買ってきました。家に置いたままになっていますが。

宇佐八幡宮（虫はちまん）のかんの虫封じの「土鳩」

ちなみにこの、かんの虫封じの土鳩というのは大津にもございます。三井寺の前の、広い通りですけど、皇子山球場の前を通ったつきあたり、——ちょうど右に回り込むと近江神宮になるんですけども——その川のところを、山側に、川沿いに上っていくと宇佐八幡宮がございまして。「むし八幡」という看板も出ています。それで、これが実は近江神宮の裏山の中腹ぐらい、結構な山の中で、無住のお宮さんなんです。では、宇佐八幡宮の人形はどこにあるかと言いますと、拜殿の下に、このようにずらっと置いてあるんですね。まあ、最近猿が悪さをするんで、すぐ落とされるみたいなことも仰ってましたけども。こういうものが、お隣京都の三宅八幡宮より、数は多く残っています。普段は無住ですけども、節分のときと、あと二月の十五日ぐらいでしたかね、正月もそうだと思いますけれども、そのときに授与されるということです。宮司さんが常住されていませんし、まして作っていませんので、これがどこから求められたのか。たぶん伏見系だけど、伏見じゃなさそうな気がします。こういうものがいまどこから供給しているのかと考えることが、三井寺の土人形をどこから手に入れたかということにも繋がってくるかと思えます。

安土 福生寺境内 轟地藏堂の「千駄地藏」（小幡人形）

それから若干、近江八幡市辺りで見ますと、中仙道界隈の武佐と愛知川（の間）、安土の老蘇というところに福生寺さんというお寺があります。その轟地藏堂というのが、小幡人形の地藏さんを、——お寺からは一切出していないんですけれども——納めて、千躰地藏の地藏堂になっています。こんな感じですね。これが全部、小幡土人形で、お堂に納められたものがいまは信仰の中心になっていますけれども、ご本尊はこの後ろにいらっしゃる石の地藏さん二体なんです。でもほとんど見えないうらびっしり（土人形で）埋まっています、いま千躰、地藏堂の主役はこの小幡の土人形になっています。

これはその土人形の、大きいほうです。確かに小幡の型です。というのも、私もたまたま二体持っていて、（一体目のこちら）色使いは文蔵さんも気分で大分変わっていたみたいですが、明らかに、この同じ型から取ってきているということになります。（二体目の）こちらは、当代の源悟さんの作ですけど、全然色使いが地藏堂のものとは違いますね。時代とともにやっぱり、綺麗になっているのかなという気が致します。さらに、2004年に彦根のサンライズ出版から出た『近江の玩具』を見ますと、色々とバリエーションがあったのが分かります。

一方、（地藏堂の土人形の）この小さいほう。ぱっと見てこれ、「小幡かなあ？」と私も思ったんですが——。これ、前型しか無いんですね。前の型に完全に土をべたっと詰めただけで、合わせ型でもなく、後ろは扁平です。こういうことは小幡でやるのかなあと思って、この間、見に行ってきたんですけど。そうしたら「んー。どうでしょうね」ということでしたので、帰ってきて『近江の玩具』を見ましたら、小さいものが正に同じ型なんです。やっぱり小幡なんだと。ちなみにこの、後ろの扁平の所にはすべて、法名というか戒名、もしくは俗名が書いてあります。ですので、子育ての為のものではなさそうだなと思っていたんです。元々、福生寺さんは、中仙道の近くに轟橋という所があって——在所の橋なんですけれども——、轟地藏堂の跡は実はここだということなんです。それを知って、「あ、これはたぶん人が亡くなって、辻送りのときに、いわゆる境界へ送り出すということに関わるものかなあ」と。異世界へ行ってしまった人とか、そういう所へ送り届ける場合の「辻送り」——特に川辺なんかが中心になるんですけど——、そういうものに関わるものだろうと。

ちなみに、この千躰地藏の小幡人形の風習は、私が把握している限りでは、五個荘の西照寺さん、それから北菩提寺町の専念寺さん、それから勝堂町の地藏堂でもやはり同じようなものがございます。どれも、五個荘駅のすぐ近くにある小幡人形の窯元から、円をぐるっと描くと、大体1km程度の範囲に建っています。つまり人形の制作地と、その需要のところが大体、「2km以内の範囲に収まる」ということも一つ注意しておきたいと思います。またこの場合は、その流通の経路として、中仙道というのが一つのキーワードになるかと思っています。

近江八幡 西光寺の「腹帯地藏」（小幡人形）

他にも、これはあまり知られていないんですけども、地藏さん（の人形）を奉納する例としては、近江八幡の西光寺さんがあります。こちらは浄土宗の大きなお寺です。ここに、坐像のお地藏さんがありまして、これはお堂の脇檀に安置されております腹帯地藏さんというもので、昔から安産祈願のお地藏さんでした。昭和40年代ぐらいに先々代の住職が、文蔵さんに「（腹帯地藏さんにあやかっ）何かないやろうか？」と人形を作ってもらい、安産祈願のお守りとして（この人形を）納めるということを始めましたんですけども、長持ちしなくて、いまはもう廃絶しております。人形の背面には「西光寺」とありますね。型はいまも文蔵さんのところにありますが、なかなか、こういう発想があっても信仰が伴わないと根付かないようです。

安土 観音正寺の「人魚」（小幡人形）

安土の観音正寺さんからは、このような人魚の土人形というのが出ていました。しかし、十年程前に観音正寺が全焼

しましたときにこの人魚も焼けてしまったので、いまや人魚伝説もほとんど知られておらず、人形も消えてしまった訳です——。

まあ、それはさておき、この人魚も千躰地蔵の風習も、全部どこで聞いても、いまはやっていないということなんですけれども、千躰地蔵なんかは明治時代を中心に、土人形を——お寺さんからは出していないくて、ちゃんと人形の窯元もしくはどこかから手に入れてきて——納める、という習慣が京都や滋賀ではあったみたいですね。ちなみに観音正寺は安土町ですから、これで見ても、小幡人形の窯元から大体 2km 以内ですね。

草津・守山の「猩々と伴達磨（張子）」「ピンピン馬とピンピン鯛」

それからもう一つ、忘れてはいけないのは草津・守山市の「猩々と「伴達磨」。いまはもう、この二つも廃絶してしまいましたが、かつては草津の「川源」さんと守山の「朝日屋」さん——これどっちも雑貨屋さんで、人形屋さんじゃないんですね——から出されていました。私も数点持っております。

一時期、廃絶を惜まれて大阪の「入船」さんという、京都・奈良から大阪の張子をいまでも一手に扱われているところですが、ここで作っていた時期もあったんです。けれども、いまは供給が止まっているものであります——。

それから、男の子が生まれると飾り馬。「ピンピン馬」といって、下の台にピアノ線みたいな針金が引いてあって、車を引っ張ると、中で木に引っ掛かってピンピンと音がするもの。女の子が生まれると、「ピンピン鯛」。まあ、非常に出来のいいものでしたが、これもなかなか地元で作る人がいなかったの、いま言った大阪で作っていた場合と、それから更にそのちょっと前でですけど伏見で作っていた場合もあるんです。こういうものが、特にかつては草津の川源さんで売っていた。昭和 50 年代にはすでに廃絶していたんですけど、60 年頃に滋賀県で国体があったとき、県から天皇陛下に献上するということで多く作ったのが、平成 10 年ぐらいまで在庫品で残っていて、これはその時期のものでした。

次は、この「猩々と」ですけども、非常に単純で、全然奥行きもなくて、こんな程度のもんですけども。95 年頃に、小学館の『サライ』という雑誌の新年号の巻頭を飾っている。滋賀県を代表するものだったんですね。これもいまはもう廃絶してしまいました——。いまは草津宿街道交流館で、代わりにこんなストラップの、プラスチック製のものが売っています。守山では、こういうものを復活しようという町興しのワークショップが毎年開かれ、割と人気があるようです。ただ、張子っていうのは手が掛かるので、紙粘土で型を作ってやっているみたいですね——。

さて、この「猩々と」「伴達磨」ですけども、これは疱瘡除けの赤物と称されるものであります。赤ん坊が生まれて、お七夜まで枕元に安置して、後に川辻——やっぱり境界の川辻なんですけれども——に奉安する。辻払いとか、辻送りにやはり関わってくるものでありまして、岐神に捧げるというふうに解釈したほうが良いので、やっぱり「神仏に捧げ物として納めた」、まあ、川に流したというものです。ちなみにこれ、結構古いんですね。1798 年に京都から出ました『疱瘡心得草』という雑誌、頒布があるんですけども、「疱瘡神祭の図」と書かれているこの挿絵、前に子供、その前に父親と母親が居るんですけど、後ろに飾ってあるこれですけども、まさにこれ、「猩々と」で、その横に小さく二体の達磨も描かれています。この「猩々と」「伴達磨」というのは、滋賀県を代表するというか、1798 年ごろまでそういう風習があったとされる、一番古いものなんですね。

ちなみに、何故「猩々と」なのか、この形はどこから来たのかという話なんですけれども、佐藤潔さんという人が昭和 10 年に著した『玩具と縁起』という、人文書院から出ているやつなんですけど、その中で、「猩々と」について「大津市内、天孫神社の山車を模したるとの説もあり」と書いています。さらに、これより遡る昭和 7 年の『旅と伝説』という雑誌でも、猩々山のからくり人形を模した、とはっきり書いています。そうすると、この土人形の下部、ぐるぐるっと描いている部分は、(からくりの)注連縄の張っている壺壺を表している。上部が、白い袴を穿いた猩々のからくり人形を

表し、注連縄の上にある線はどうも足先を表しているを見たほうが良いでしょう。この、猩々のからくりというのは、酒壺を売るコウフウという中国の人が前方にいて、その酒を酌んで、猩々が飲むと、猩々の顔が真っ赤に変わるという仕掛けになっているんですけれども、どうもこれに由来するというんですね。ただ、草津と猩々山（＝大津祭の山車）のある大津は、ちょっと距離がありますので、果たしてどの程度これを、信じて良いのか分かりませんが。ただ、先ほど申しました草津の「ピンピン馬」とか「ピンピン鯛」なのですが、最近、彦根のほうに、どうも明治時代にあったというのが解ってきました、そういうことを考えると、ひょっとしたらこの「猩々」に関しても滋賀県一帯で信仰されて使われていて、そして最後まで残ったのがこの守山・草津の「猩々」だったのかなという気がします。そうすると、いまはなくなって久しいんですけれども、元々の起源が大津祭にあるのなら、大津辺りで復元しても、充分「ちま吉くん」と一緒に人気のマスコットになろうかと思えます。

まあそれはさておき、「猩々」と「伴達磨」は疱瘡除けの赤物であったということ。ちなみにこちらの「伴達磨」ですけれども、普通、達磨さんというとあの起き上がりをイメージするんですけれども、京都を中心として近畿地方、または西日本の達磨さんというとは、選挙のときに目を入れる目無し達磨じゃなくて、こういう小さな姫達磨が中心になります。壬生寺とか吉田神社とか市比賣神社とか、これをいま出しているところは全部、大阪の入船さんのところでやっています——まあ、それもさておき、赤物というのは、先ほど申し上げましたように、この三井寺さんの土人形もすべて赤物の範疇に入った訳であります。赤というのは、例えばいまでも神社、お稲荷さんでも、赤（朱）を選りますけれども、ああいうものは「魔物を弾く」ということで朱色を使っている訳であります。この朱についてはもう古墳時代から、棺の内側に朱を塗るとか、日本では割と古代から使われてきたものですが、そういうもののリバイバルとして近世でも赤いものが使われました。特に、滋賀の赤物というものを考えると、ここで興味深いのは、三井寺さんで江戸時代に——これは執事長にこの間教えてもらったんですが——、「疱瘡除け守」を出していたんだそうです。

疱瘡除け守、これは基本的に子供の御守りです。三井寺さんで昔そういうものを出していた（授与していた）。配布資料の史料2、3にありますように、——これは版木を反転した画像ですが——頭のところに「疱瘡除御守井小札」というふうに書いています。それに続いて、「政所、疱瘡守り札につき 口触」、「政所」はいままで言うところの三井寺の事務所みたいな所ですけれども、「今度寺中より疱瘡之守札出候に付、不宣儀共多く有之候間、向後者疱瘡之守札出し候儀、堅可為無用候、猶又惣而新法成儀、令停止候、若密に札守之類相調、諸方江出し候而商壳体之様にいたし候儀、外より相聞江候者、急度有其沙汰候、以上、」と書いています。要は、「三井寺さんの管轄で疱瘡守りを出しているところがあるけれども、事務所としては関知していないので、今後は止めておきなさい。外から聞いたら聞かぬのが悪いので、あかんよ。そういうことがバレたら、それなりの料金を課すよ」という御触書が出たということですね。これが「七月六日」とあり、時代はいつか解らないんですが、まあ、江戸の後期であろうと考えられます。裏を返せば、その時期に、三井寺さんの色んな寺院で盛んに疱瘡除けの御守りが出ていたということ。で、疱瘡というのはいまの天然痘等になる訳ですけれども、子供がすぐく罹りやすく、何度も江戸時代に流行して、子供が罹ったら必ず致死にいたるので恐れられていたものです。そういうこともあって、草津のあの「猩々」のようなものが出ていたんですけれども、三井寺さんでも実は、疱瘡守りが出ていたと——。

それで、ここでやっぱり、この三井寺さんの土人形の赤物というのは、単に安手のものというのではなくて、やはりこの赤に意味があって、疱瘡除けの赤物であった可能性というのを一つ考えてみよう。このことについては何にも記録には出てきませんが、「赤物」というものと、それが一般に疱瘡除けとしても授与されていたこと、更には三井寺さんでも子供用の疱瘡除け守りというのが出ていたという前提、且つそれを禁じていたということ等を考えると……。

このような状況証拠から考えると、どうもやっぱり、子供の、赤子の守り神である護法善神堂へわざわざ赤物を奉じる、それはやはり「疱瘡除け祈願が中心だった」のではないかと。これが、今日の話の結論でございます。

今日の話の結論

そうなると、多分 1800 年ぐらいまでに、三井寺における疱瘡除け守りの授与停止を受け、いままでお寺さんから出していたのがなくなってしまって、まあ云わば、梯子を外された門前の人たちというか、信仰していた人たちが、今度はお寺さんのほうへ——護法善神堂のほうへ——祈願として土人形を奉納する。恐らくこれは、疱瘡除けを中心に、1800～1900 年の間になされたんだろうと。そういうことが歴史的に位置づけられるのではないかと。それで、先ほど申し上げました 1800～1900 年の約 100 年間の変遷において、いくつかの表現が変わっていく中で、伏見人形の古い姿を、実は良く伝えているのがこの護法善神堂の土人形ではないか、というのが今日の結論であります。

人形の供給ルート

最後ですけれども、人形の供給ルート。伏見人形の窯元がどこにあるかと言うと、伏見のお稲荷さんの辺りです。明治時代に数十軒あったというんですけれども、(大津の人々も) 直接そこまで買いに行ったのか。ちょっと遠いですね。さっきも言いましたように、小幡の千躰地藏なんかを考えてみますと、大体 2km 以内だったら歩いて行けるけど、ちょっと伏見までここから行こうと思ったらしんどいので、大津町で纏めて仕入れるような中継ぎがあったのではないかと——。

じゃあ人形屋さんで売っていたのかというと、——先ほどの草津の「猩々」の例にもありましたように——恐らくそういう日用品の中の一つとして扱われていた。だからやっぱり、地元の人形屋さんというよりも、雑貨屋さんの取次ぎで、そういうものが置いてあって、そこで求めて、納めた。逆に言うと、そういう需要があるから雑貨屋さんのほうでも求めたんですけれども、恐らく、そういうものが 1900 年になりますと、ワニスの、「有害性着色料取締規則」が発布されて——この時期というのは日露戦争の頃ですけれども、だんだんブリキのおもちゃとか、おもちゃの志向が変わって来ますので、伏見の人形屋さんもどんどん潰れていく時期です——そういうことも相俟って、土人形はだんだん廃れていった。併せて、ワニスの塗っていないものを扱った場合、罰金で 20 万も取られるというのはしんどい話です。で、「それやったら扱わんでも、今やったら他に代用品もある」ということでだんだん廃れていった。またこの時期というのは、疱瘡というものに対する日本近代の医学の発達時期に重なって、またしても土人形やその文化というものが無くなってしまったのではないかと、ということになるかと思えます。

今回の結論としては、(三井寺の土人形は) 全体が伏見の人形で、恐らく護法善神堂に疱瘡除けの赤物として納められた、古い伏見の型をいまに伝えるもので、そういった点でも非常に貴重であるということでございます。

一応これが、与えられた 90 分で話す内容のすべてでございます。どうもご清聴ありがとうございます。